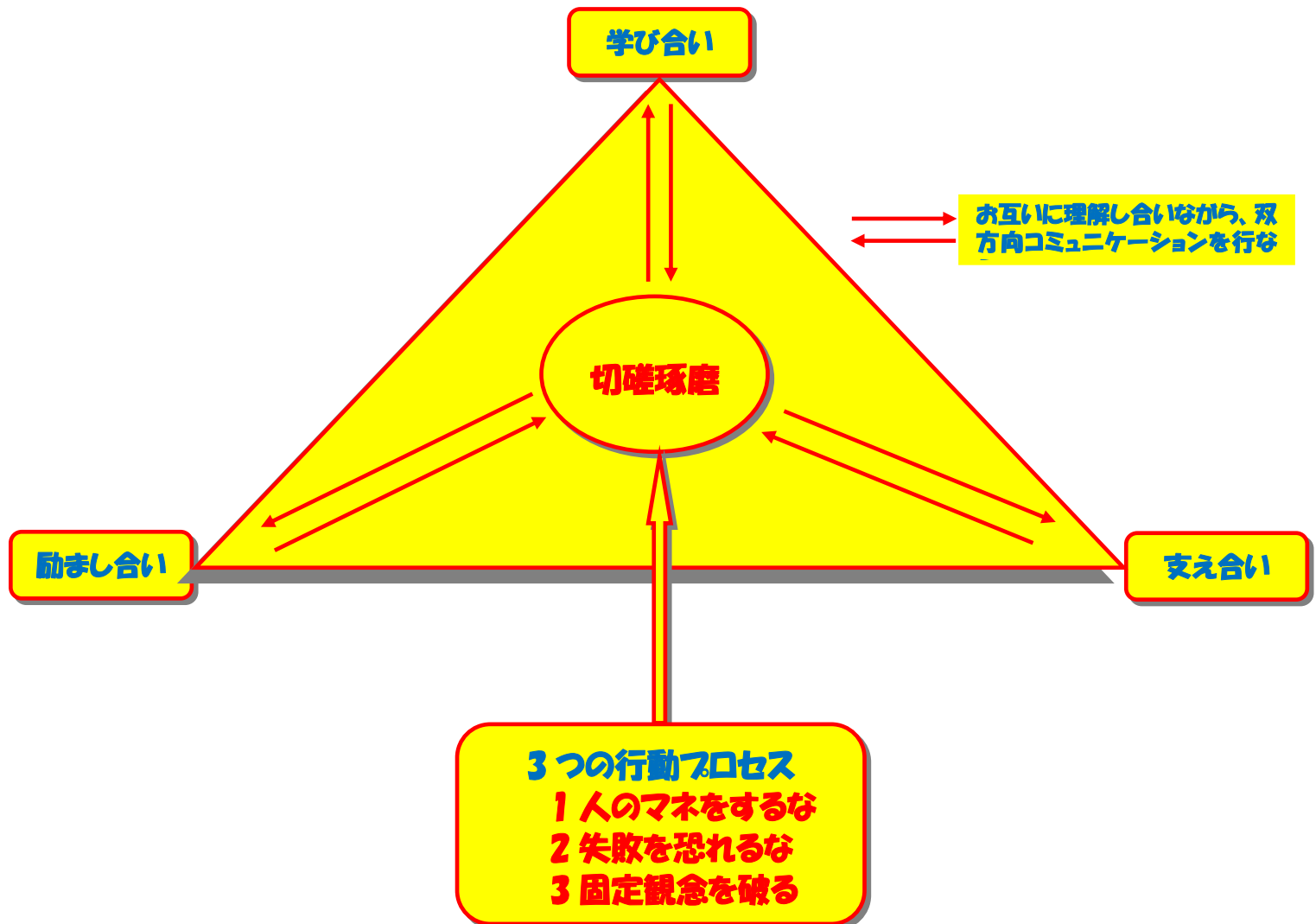


切磋琢磨への道

図1 切磋琢磨¹⁾への道に辿り着ける3つの条件と3つの行動プロセス



出所:筆者作成。

¹⁾ 切磋琢磨の出典は、中国最古の詩集『詩経』の「衛風(えいふう)・淇奥(きいく)」による。そもそも切磋琢磨とは、それぞれ材料を加工する作業の事を表している言葉として、「切」は骨を加工する時の作業、「磋」とは象牙を加工する時の作業、「琢」とは玉を加工する時の作業、「磨」とは石を加工する時の作業を指す。これらを加工する作業というのは大変手間のかかるものであり、丁寧に取り組まなければならない。このことから、勉強したい道徳に励んで人間を成長させることや、友達同士競い合い励まし合って自分の心身を磨くことを「切磋琢磨」という様になった。辞書によれば「切磋琢磨」とは、「仲間同士互いに励まし合って学問を向上すること」と書かれている。英和辞書によれば、「切磋琢磨」とは、「Work hard together : be in friendly rivalry」と翻訳されている。筆者は、ここで言う切磋琢磨の定義を「同じ志を抱いた仲間同士が定めた目標を最後まで成し遂げるため、友好的なライバル意識を持ちお互い学び合い、励まし合い、支え合い、理解し合いながら成長・発展していくことである」と捉えていきたい。

我々人間というものは、死に至るにあたって、周りの人々と共存共栄しながら成長・発展していく生き物であると考え、すなわち、常にお互いに学び合い、励まし合い、支えあい、理解し合いながら、成長していかないと人間としての発展は勿論、基本的に備えるべきである社会的動物としても生きていけないと考える。

その上、我々人間に、周りの人々と生活するにあたって、最も重要なことは自分自身の存在意義(アイデンティティ)を発見し、それを成長・発展させることも非常に重要な作業であると思われる。まず、その作業を3つの行動プロセスに分類すると、次のようである。まず、第1に、人のマネをするな、第2に、失敗を恐れるな、最後に固定観念を破ることである。²⁾

上述したことを簡単明瞭にまとめると、切磋琢磨への道に辿り着ける3つの条件と3つの行動綱領を表すことである(図1を参照)。

まず第1に、ここで言う学び合いの意味は、知識面のみならず人間的な面等を含め、色んな面においてお互いの事を尊重すると同時に、見極めながら学ぼうとする心構えである。またそれは、学歴と社会的な地位(ステータス)、年齢の差等を問わず当てはまる意味合いである。その心構えを保ち続けるためには、常に謙虚な心と、相手の立場から考える心が不可欠である。言うまでもなくそれらは、ごく当たり前のことでありながらも、実際に自分の生活の一部として実践し守り続けるのは、そんなに簡単なことではないと思う。

第2に、励まし合うということは、それぞれが自分の仕事に取り組んでいる最中であっても、高い壁にぶつかっている時に、迷わずお互いに手を差し伸べて力になることである。例えば自分が自分に余裕がない時でも……。

第3に、支え合うということは、認知的な信頼だけではなく感情的な信頼に基づいてお互いを支えることを指す。つまり、最初の人間関係においては、お互い何らかの形(物理的なモノや精神的なモノ等)での交流を通して支えられたい支えたいする。さらにこの関係は、時間が経つにつれ、意識せず、自ら自然に心の触れ合いの関係を結ぼうとする心が込み上げてくる。要するに、前者の認知的な信頼とは、ギブアンドテイクの関係であり、後者の感情的な信頼とは、見返いを求めない無償の愛がこもった信頼関係であると言えるであろう。しかし、後者の信頼関係を維持することは、至難の業である。

最後に、我々が周りの人々とコミュニケーションを行うにあたって、最も基本的な姿勢であり、かつ重要なことは、お互いの歴史や価値観をきちんと理解し合って、それらを認めた上でコミュニケーションすることである。そのような方法でコミュニケーションを取っていくと、せめて誤った先入観や歪んでしまった心で人のことを判断したり、解釈したりすることはないだろう。

今日において切磋琢磨という言葉は、日常の生活からビジネスに至る多くの場面で用いられている言葉である。例えば、小さな団体のリーダーや、中小企業のリーダーは勿論、大手企業のCEO(最高経営責任者)まで、全社的なレベルで組織を総合的ないし統合的にまとめようとする際に、よく使われている言葉でもある。

²⁾ ここで言う3つの行動プロセスは鈴木会長(現株式会社 セブン-イレブン・ジャパン株式会社 イトーヨーカ堂会長)の口癖である。

冒頭で述べたように、人間は 1 人では生きていけない生き物である。言い換えれば、そもそも人間は不完全な生き物であるがゆえに、お互いの足りない部分を補い合いながら成長・進歩してきた。例えば、昔は物々交換が行われた時期もあったが、今日においては、モノだけではなく、自分の人生の経験や知識を交換・共有できるような時代になっている。

また、人間が何らかの形で成長・発展していくためには、いかなる組織に所属せざるをえない。それから、その組織に溶け込んで、真の意味での Two-Way Communication を得るためには、冒頭で述べた切磋琢磨への道に辿り着ける 3 つの条件(学び合い、励まし合い、支え合い)が不可欠であると考ええる。

次に、切磋琢磨への道に辿り着けるために、求められる 3 つの条件(学び合い・励まし合い・支え合い)の中心となる 3 つの行動プロセスについて述べたいと思う。

まず、人のマネをするなという意味は、自分のオリジナリティ(独自性)・自分らしさを磨くことを指している。勿論、自分自身が未熟な段階においては、人の良い所を真似ざるを得ない。しかし、時間が経つにつれ、それらを自分なりに学習しながら、自分のモノにしないと自分の存在意義を相手にはなかなか明確に伝わりにくくなる。

次に、失敗を恐れるなということは、常にチャレンジ精神を持つべきであることを指している。つい我々は、何事に失敗した事に対し、何か大きな過ち(汚点)を犯したみたいに見なされがちである。但し、同じ失敗を同じ原因で繰り返すことは、望ましくないことであり、必ず避けるべきである。そもそも失敗というものは、そんなに恥ずかしいことではない。実際、自分自身の発想の転換によって、その失敗から学べる事が沢山潜んでいるわけである。ここで肝心な所は、その失敗の原因を明確に究明することによって、今まで見えなかった新しい突破口が見えてくることである。ある意味で我々は、その失敗を恐れずに自分達が求める事を成し遂げるため、さらに前に前に進むべきである。

最後に、固定観念(ステレオタイプ)を破るということは、つい我々は、自分達が習得した情報(様々なメディア、友人から聞いた噂話等々)のみが正確であると判断しようとする習慣や癖を果敢に捨てる事を指している。勿論、筆者も、その愚かな癖を持っている人間の 1 人であるかもしれない。さらに、客観的に物事を洞察する力や、人間関係を含んだ世の中の事を様々な角度から見極め、判断出来る脳みそ・眼・心を持つためには、徹底的に固定観念のような古い発想は捨てるべきである。

以上のように、上述したすべてを踏まえながら、自分自身を取り巻く環境の中で、常に接している同僚もしくは人々とともに、学び合い、励ましあい、支え合い、理解し合いながら、成長・発展していくことこそ、本稿で強調し続けている切磋琢磨への道に辿り着ける精神であると筆者は信じていたい。